

「まるごと (A 1) 日本語オンラインコース」 サイトの開発

武田素子・熊野七絵・千葉朋美・笠井陽介・石井容子・前田純子・北口信幸

1. 開発の背景

今般、国際交流基金では、世界各地で地理的、時間的制約等により、日本語の教室に通うことができない学習者やこれから日本語学習を始めたいという人を主な対象者として、eラーニングを通じて学習の機会を提供する「JF eラーニング総合プロジェクト」を進めている。本プロジェクトの核となっているのが、2016年7月より「また来たくなるeラーニング」を基本コンセプトに運用を開始した、日本語学習のためのプラットフォーム「JFにほんごeラーニング みなと (<https://minato-jf.jp>)」(以下、「みなと」)である。「みなと」では、各種日本語オンラインコースが開講されており、学習者はユーザー登録をするだけで、いつでも、どこでも日本語学習を開始することが可能となる。

「みなと」で開講している日本語コースの中で、メインコースとして位置づけているのが、「まるごと日本語オンラインコース (<https://www.marugoto-online.jp/info/>)」(以下、まるごとコース)であり、現在、日本語の入門期の学習者を対象とした「まるごと (A 1) 日本語オンラインコース」(以下、A 1コース)を開講している。A 1コースは、国際交流基金が開発したコースブック『まるごと 日本のことばと文化 入門 A 1 かつどう』及び『同 りかい』(以下、『まるごと』)のカリキュラムとシラバス、素材を基に、ウェブサイト「まるごと+ (まるごとプラス) 入門 (A 1) (<https://a1.marugotoweb.jp>)」(以下、「まるごと+」)、「まるごとのことば (<http://words.marugotoweb.jp>)」のコンテンツを活用して開発したA 1コースサイトで自学自習を行うオンラインコースで、読む、聞く、話す、書くの4技能全てに関わる活動を含むインタラクティブなコースを目指している⁽¹⁾。

本稿では、自学自習用のコースサイトの開発にあたり、どのようなコンセプトを持ち、それらをどのように具現化したのか、コースサイトの構成と開発上の工夫について報告する。

2. 開発の方針

2.1 利用対象者とニーズ

『まるごと』の主たる対象者は海外の一般成人である(来嶋他2012)。まるごとコースの対象者は、その海外の一般成人の中でも地理的、時間的制約から日本語学習を開始、継続できな

かった人やオンラインで学びたい人であり、千葉 (2016) では、以下の5点がニーズとして挙げられている。

- (A) 様々な制約により教室に通うことができないが、日本語が学びたい
- (B) 端末や場所に限定されず、生活スタイルに合った学びがしたい
- (C) 楽しく気軽に日本語を学びたい
- (D) 日本語の言語的な知識をしっかりと学びたい
- (E) 学んだ日本語で、コミュニケーションしてみたい

2.2 開発のコンセプト

ユーザーのニーズと利用形態、『まるごと』の特徴に加え、開発者自身の各国語のオンラインコース受講経験^②から、自学自習用のコースサイトを開発するにあたり、①自学自習が「楽しく」続けられる、②大人が「気軽に」使える、③日本語で「できる」を実感するという3つを開発のコンセプトとした。これらのコンセプトを実現するために、開発時に気をつけたポイントは以下の通りである。

① 自学自習が「楽しく」続けられる

オンラインでの学習は、いつでも、どこでもでき、簡単に始められるという長所がある反面、やめるのも簡単で、継続するのが難しいという特徴を併せ持っている。そのため、興味を持って始めた日本語学習を、ユーザーが楽しく、そして無理なく続けられるものにするため、以下の3つの要素が必要であると考えた。

- (A) インタラクティブな練習を通して、主体的に学べる。
- (B) 学びのサポートを通して、自分で理解を深めながら学べる。
- (C) 学習進捗を把握しながら、自分のペースで学習が進められる。

② 大人が「気軽に」使える

本コースが対象とするユーザーは、日本語に興味はあっても近くに日本語教室がなかったり、日々仕事や学業、家事や育児に追われ、学習する時間が取れなかったりと様々な問題を抱えている。オンラインでの学習の魅力は、学習する時間や場所を選ばず、ユーザーが生活スタイルに合わせて、気軽に学習できる点である。学習したいと思ったときに、「気軽に」学習できるよう、以下の3点に配慮することとした。

- (A) マルチデバイス対応で、どの端末でも学習しやすい見た目や操作性である。
- (B) 通信速度の遅い地域でもストレスなく使える。
- (C) 説明書を読まなくても、直感的に使えるデザインである。

③ 日本語で「できる」を実感する

想定されるユーザーの多くに「日本語でコミュニケーションしてみたい」というニーズがあ

る一方で、本コースの対象者は学んだ日本語を使って、実際にコミュニケーションする機会がない人も多くいると考えられる。そこで、自学自習でも、ユーザーが積極的に参加できる活動や練習の場を設け、日本語で「できる」ことを実感しながら学べるものにするために、以下の3つを取り入れることとした。

- (A) 日本語の使用場面をイメージしながら、実際の場面に即した練習ができる。
- (B) 4技能の課題遂行型の練習を通して、インタラクションのある学びができる。
- (C) 自己評価、学習成果の記録を通して、学習のふりかえりが行える。

これらを念頭に置いてコースサイトの開発を行ったが、具体的なサイト内のコンテンツについて述べる前に、次章では、まず、まるごとコースでの学習の流れについて説明する。

3. まるごとコースでの学習の流れ

まるごとコースは「みなと」上で開講されているため、「みなと」で受講登録をすると、まるごとコースサイトへアクセスできるようになり、学習が始められる。コースブックと同様に「かつどう」と「りかい」の2つのコンテンツで構成し、A1コースでは、日本語を気軽に学びたい人のための「かつどう」コースと、体系的にしっかりと日本語を学びたい人のための「かつどう・りかい」コースの2種類の「自習コース」を開講している³⁾。

コースサイトでの学習の流れは、コースブックに準拠し、「かつどう」では「目標を知る」から「Can-do チェック」まで、「りかい」では「勉強する前に」から「にほんごチェック」まで、課ごとに学習が進むようになっている。そして、「かつどう・りかい」コースでは「かつどう」の後に「りかい」という順に、1課ずつ交互に学習が進んでいくよう構成している。また、課の途中で学習を中断しても、次回アクセス時には前回の最終学習ページが表示されるようになっており、『まるごと』の学習の流れに沿って進められるようにしている。

4. まるごとコースサイトを構成するコンテンツ

まるごとコースサイトは自学自習用のコースサイトであり、学習を進める「学習ページ」と学習進捗を把握する「マイページ」で構成し、全てのページをPC、タブレット、スマートフォンと、どの端末でも利用可能なように開発している。以下、「学習ページ」と「マイページ」に分けて、開発上の工夫を中心に紹介する。

4.1 学習ページ

4.1.1 「かつどう」コンテンツ

コースブックの「かつどう」は、コミュニケーション言語活動を目標として、言語項目を絞り、少ない学習時間でも日本語を使って課題遂行できるようになることを目指して開発されて

いる (来嶋他2014)。そのため、A1コースサイトでも日常場面でのコミュニケーション実践力が身につけられることを目標にサイトの開発を行った。しかし、オンラインでの自学自習の場合、教師やクラスメイトとのインタラクションやアウトプットの場を設けることが難しい。そこで、自学自習であってもユーザーが主体的に学び、活動する場をどのように実現したのかという点を中心に、学習の流れに沿って「かつどう」コンテンツの紹介をする。

① 「目標を知る」

課のはじめでは、教室活動としては扉の写真を見て母語や媒介語で話し、どのようなことを学習するのかなど背景知識を活性化する活動が想定されている。自学自習でも学習内容を想像し、文脈を把握した上で学習に臨めるよう、トピックの提示の後に、場面や状況を解説言語で書いたストーリーのページを設けた。また、目標 Can-do の提示の後には、場面をより明確にするため、写真やイラストと共に解説言語で場面を提示するページを入れている。

② 「見る・聞く・言ってみる」

この活動では、まず「ことばを知る」ページを設け、画像を見ながら文レベルの音声を繰り返し聞けるようにすることで、インプット、アウトプットの場としている。また、語彙の導入も兼ねていることから、単語レベルの音声も聞けるようにしている (図1)。次に、教室での「聞いて指差す」活動の代わりに、「聞いて画像を選ぶ」ことで、語彙を覚えるための活動を取り入れ、ランダムにリズムよく出題される設定で、飽きずに取り組めるようにした。



図1 「見る・聞く・言ってみる」

③ 「聞く・気づく」

聞く活動では、コースブックと同様に写真やイラストを手掛かりに会話やモノローグを推測しながら聞けるようにし、正誤判定後でも音声を聞き直せるようにすることで、自分で理解が深められるよう配慮している。また、次の活動にスムーズにつながるよう、会話の流れを見て確認するための会話例の確認のページを設け (図2)、音声に合わせて該当する発話が強調表示され、どのような表現が使われているか気づきを促せるようにした。



図2 「聞く・気づく」

④ 「使ってみる」

教室活動でのペアで話す活動の代わりに、自学自習でも実際の場面に即した話す活動ができ

「まるごと (A1) 日本語オンラインコース」サイトの開発

るよう、「まるごと+」の動画（ドラマでチャレンジ）を活用した。「ドラマでチャレンジ」とは、自分自身が主人公となったドラマの中で、場面や状況に応じて日本語でどのように言えばよいのか考えながら課題遂行の練習が行えるよう構成された動画である（川嶋他2015）。この動画を活用することで、話す相手がない環境でも、日本語を使って話す疑似体験ができる課題遂行活動



図3 「使ってみる」

を実現した。また、自学自習であっても、実際に声を出した活動を促せるよう、新たに録音・再生機能を設け、会話に合わせて自身が発話した音声を聞いて確かめることにより、「できる」が実感できるようにしている（図3）。

4.1.2 「りかい」コンテンツ

コースブックの「りかい」はコミュニケーション言語能力を養うもので、文法・文型・語彙などを文脈の中で理解し、使えるようになることを目標に開発されている（来嶋他2014）。まるごとコースでは「りかい」コンテンツは「かつどう」コンテンツと併用して学習を進めることを前提とし、コースサイトでも、コミュニケーションの中で日本語がどう使われるか、日本語のしくみについて学ぶことを目標に開発を行った。文脈・場面の中で、文型や文法の意味・機能・形を理解できるよう、教師がいない環境で、インプットからどのように気づきや理解を促せるようにしたかという点を中心に、学習の流れに沿って「りかい」コンテンツを紹介する。

① 「きほんぶん」

ユーザーへ質問を解説言語で投げかけ、課の内容を想像し学習内容に入る流れとしている。

② 「もじとことば」「かんじ」

「もじとことば」では、「かつどう」で導入された語彙に新たな語彙も加わっていることから、同ページ内に語彙帳を参照できるボタンを設けており、適宜活用しながら様々なタイプの練習に、リズムよく取り組めるようにしている（図4）。また、「かんじ」では、画像や解説言語を用いた意味の確認、タイピングによる読みの確認練習を取り入れた。



図4 「もじとことば」

③ 「かいわとぶんぼう」

教室ではモデル会話を聞いて文字を追ひ、どのような文脈で文法・文型が使われているか気づき、教師による説明を聞いたりして、文法・文型の意味や作り方が理解できるような流れが

想定されている。自学自習では、気づきを促す教師や、理解を確認しあう仲間がいない。一方で、ユーザーが理解できる解説言語による説明を行うことが可能であるという利点を活かし、まず、モデル会話を聞いて、解説言語による内容確認をする練習を設けた。次に、その会話で使われている表現への気づきを促せるよう、該当する表現を抜き取ったモデル会話を提示し、会話を文字で追いながら、選択肢から当てはまる表現を選択する練習を取り入れることで、形に注目させるようにした(図5)。モデル文の文脈、意味、形への理解を促した後で、解説言語による文法解説ページを設け、学習の流れに沿って、徐々に、そして自分自身で理解が深めていけるような学習の流れが実現できるよう設計している。



図5 「かいわとぶんぼう」

④ 「どっかい」「さくぶん」

「どっかい」では文章を読んで答える練習を、「さくぶん」ではコースブックでのモデル文のなぞり書きの代わりに、モデル文を見ながらタイピングする練習(図6)と、モデル文や語彙帳などを参照しながら、自分のことについて実際に書く活動を課題として設けている。このように、4技能の課題遂行型の練習を通して、インタラクションのある学びを実現した。



図6 「さくぶん」

4.1.3 学習サポートコンテンツ

今回、オンラインでの自学自習用のコンテンツを開発する上で意識したのが「学びのサポート」である。開発者らが各国語のオンラインコースを受講する中で感じたのは、自学自習では分からないことがあっても、質問できる教師や仲間がいないため、孤独や不安を感じやすい環境にあるということである。興味を持って始めた日本語学習を楽しく、そして無理なく続けられるよう、「かつどう」・「りかい」コンテンツでの学習内容で分からないことがあった場合に解決できる手段として、「学習サポートコンテンツ」を開発した。

「学習サポートコンテンツ」は、各学習ページの文法や文化に関する説明を記載した「ページ内の参照」(図7)、該当課のことば・きほんぶん・かんじに関する解説をまとめた「各課の参照」(図8)、コースの内容一覧や文法資料、単語検索機能を備えた「全体の参照」(図9)の3つで構成した。これらは、ユーザーが見たいと思ったときに利用できる位置に配置し、必

「まるごと (A1) 日本語オンラインコース」サイトの開発

要に応じて参照することで、自分のペースで理解を深めながら学習が進められるようにしている。



図7 「ページ内の参照」

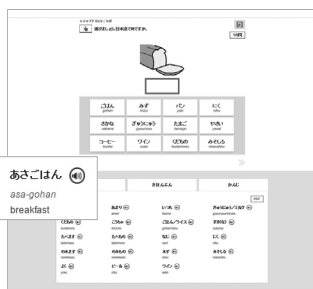


図8 「各課の参照」



図9 「全体の参照」

4.2 マイページ

A1コースサイトでの学習を支えるもう1つのコンテンツが、「マイページ」である。これは、JF日本語教育スタンダードが提案する評価のツールであるポートフォリオをオンライン上に実現したものであり、マイページは学習進捗を把握する「学習進捗ページ」と学習成果を把握する「ポートフォリオページ」の2つのページで構成されている。

① 「学習進捗ページ」

コースの全体像と学びの過程を把握しながら学習が進められるよう、学習進捗が一覧できる表を設け、各コンテンツの活動や練習の単位で閲覧回数や課題の提出の有無が確認できる(図10)。また、学習を終えた後、苦手な部分を復習できるよう、表の中から活動や練習を選んで直接該当ページへ行けるようにしている。

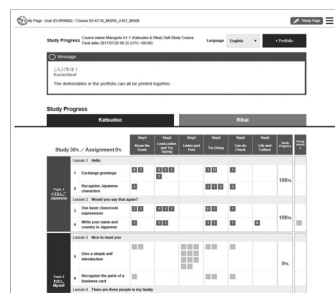


図10 「学習進捗ページ」

② 「ポートフォリオページ」

Can-do チェックやにほんごチェックでの自己評価やコメント、書く課題などの学習の成果が一覧で表示され、自分で学習の成果を確認しながら学習が進められるようにした(図11)。また、同ページ上で「日本語・日本文化の体験記録」を写真付きで記録することもできる。これらのポートフォリオ内のデータは、ボタンを押すだけで一括でPDF化や印刷ができるようになっており、コースの途中でも、コースを終えた後でも、いつでも見返すことができるようになっている。



図11 「ポートフォリオページ」

5. おわりに

本稿では、「大人が楽しく気軽に自学自習できるオンラインコース」を実現するための開発上の工夫について報告を行った。本コースサイトを活用し、関西国際センターでは2016年度には既述の4つの「自習コース」のほか、自学自習に教師による課題の添削やライブレッスンが付いた「教師サポート付きコース」を開講する。それに加え、2017年度以降はより多くの人に使ってもらえるよう、コースサイトの多言語化を行うと共に、本コースサイトを活用したオンラインコースの運用が国際交流基金の海外拠点でも開始される予定である。

今後、ユーザーの学習進捗のデータ等を活用してコースサイトの分析を行うと共に、コース運用のノウハウを蓄積しながら、本コースサイトを活用した効果的なオンラインコースの設計について検討を行い、今よりも更に大人が楽しく自学自習できるオンラインコースを目指して、まるごとコースのサイト開発、及びまるごとコースの運用を行っていききたい。

[注]

- ^①開発にあたり、『まるごと 日本のことばと文化』公式ポータルページ (<http://www.marugoto.org/>)に掲載されている『まるごと』の教材や教師用リソース、国際交流基金マドリッド日本文化センターが制作した『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1 文法解説書』を参考にした。
- ^②アンスティチュ・フランセ日本が運営する「e フランセ総合フランス語0 CEL1」、Goethe Instituteが運営する「Deutsch Online Individual A1」、セルバンテス文化センターが運営する「スペイン語オンラインコース AVE 担当講師付き自習コース (A1.1)」、STUDIAMO.comの「オンラインイタリア語テキスト初級」での受講経験を基に、本コースサイトの開発を行った。
- ^③オンラインコースでは1課～10課をA1-1、11課～18課をA1-2として区切りを設け、現在「みなと」上では4つ(A1-1かつどう、A1-1かつどう・りかい、A1-2かつどう、A1-2かつどう・りかい)の自習コースを開講している。

[参考文献]

- 川嶋恵子・和栗夏海・宮崎玲子・田中哲哉・三浦多佳史・前田純子 (2015) 「日本語学習サイトまるごと+ (まるごとプラス) の開発—課題遂行と異文化理解を助けるウェブサイト—」『国際交流基金日本語教育紀要』第11号、37-25、国際交流基金
- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2012) 「JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』第8号、103-117、国際交流基金
- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2014) 「『まるごと 日本のことばと文化』における海外の日本語教育のための試み」『国際交流基金日本語教育紀要』第10号、115-129、国際交流基金
- 千葉朋美 (2016) 「まるごと (A1) 日本語オンラインコース」の開発—大人が楽しく自学自習できるeラーニングを目指して—」『2016年日本語教育国際研究大会口頭発表予稿集』